

一瞥したあと、空然は里見実堯を一瞥し

「このこと、里見家は知っておるのか？」

「いえ、一向に」

「うむ」

二度読み直して、空然は書状を懐に押し込んだ。

「鎌倉という場所は、格式と建前ばかりで、面白くもない処である」

空然はぼそりと呟いた。

独り言なのか、判別もつかず、里見実堯は傍らの正木通綱を一瞥した。正木通綱もただ俯くだけであり、実堯もそれに倣った。

「房総とは、さぞや空気がうまかろうな」

「は？」

「いや、気にするな。戯れ言よ。大儀であった。

上総介にもよろしく伝えて欲しい」

鶴岡八幡宮から朝比奈切通しを経て、六浦湊に停泊している舟に向かう里見実堯は、終始傍らに控えていた正木通綱に

「八正院殿は還俗する気だな」

と呟いた。正木通綱もそう見ていた。

ここで空然が還俗したら、果たして古河公方家はどのようになるものか。

「まずは乱が起きようかの」

「真里谷を渦中にした乱でしような」

正木通綱は涼しげに呟いた。

「書物ばかりに執心の若殿にも、一統の夢より醒めて頂く好機であろう」

実堯もそう言葉を継いだ。

峠を越えると、木々の彼方に六浦湊の海が輝いた。この日は梅雨の気配もない夏の陽気である。この湊は、当時、鎌倉に赴く玄関口であった。

大きく帆を張った舟は六浦より発ち、みるみると三浦半島が遠ざかっていった。ここから鷹ノ島までは、江戸内海の潮流に乗ればいい。

「幼少の故地、覚えておいでか？」

里見実堯の言葉に、正木通綱は首を横にした。

三浦の地は、もはや異国であった。この地の思ひ出はひとつも心にはなかった。

「安房こそ、我が国なり」

江戸湾は風の如く静かであった。

程なく。

鎌倉を震撼させる事件が起きた。

なんと、前触れもないまま、空然が雪下殿を出奔したのである。墨衣を颯爽と脱ぎ捨てた空然は、一旦消息を絶った。

果たして還俗を唆した真里谷信勝のもとへと思いきや、意外にも、空然の向かった先は古河であった。

もともと空然にとつて、出家は体質に合わなかったのだ。契機としては不純かも知れないが、真里谷信勝の書状は、還俗する決意を後押ししてくれたのである。

このとき空然が古河へ奔ったのは、還俗こそ望むものの、他に野心がなかったことが窺える。少なくともこのときの空然には

「父や兄を蹴落として、関東の主とならん」という野心が微塵もない。

足利家の隆盛のためには、傍流という分を弁え、ひたすら家を支えるための一武将たらんと志していた。

が。

空然は古河で現実を識る。

鎌倉で聞かされた上杉顕定による調停は、表向きのことであり、政氏・高基とも、内実は未だに諍い会っていた。公式にはきちんと整っている」と報じられていた筈の和睦も、当事者は誓詞を交わすことなく、睨み合っていたのだ。

「父上、これはいったい」

空然は驚いて父・足利政氏に詰め寄った。

「この親不孝者め」

政氏は悪びれもなく空然を詰った。

「当家の男子は揃いも揃って父に逆らう、忌々しい限りなり」

と、久方ぶりの我が子を労いさえしなかった。ならば仲介をと乗り込んだ兄・高基も、その眼差しは厳しかった。

「儂に取って代わるつもりか」

その冷たい言葉が、肉親の情を無情に引き裂

いた。

まやかしの和解、父親への失望。

そのうち空然は奥州へと去るのだが、それはほんの僅かな期間であった。この空然が、関東を揺るがす風雲児と化して舞い戻ってくるのは、間もなくのことである。

永正六年（一五〇九）七月、原式部少輔胤隆は足利高基との密議に養子・朝胤を差し向け、その忠節ぶりを大いに称えられた。

このとき胤隆は幾分病んでいた。そのため出家し、〈入道全岳〉と号していた。出家に際し、養子に後事を託しつつも、実権は未だ掌握していた。

主家たる千葉氏をも従える勢いの原氏は、紛れもなく、上総国の台風の目であった。この屈服こそ、真里谷氏にとって最大の課題であり、そのため、なりふりなど構っていられなかった。里見氏との盟約に応じたのも、旗頭として空然に目をつけたのも、そのためのことと思えば至極当然の仕儀なのである。

この頃。

足利高基は再び父・政氏と諍うために、再び関東の諸将を手懐けようとしていた。静謐を迎えていた関東の平穩は、この父子相克が、簡単に破ろうとしていた。

父子の相克が渦巻く足利公方家。

嫡庶割れる房総武田氏。

子の末を案じずにはいられない里見氏。

どの家にも事情があり、小さな形で済まぬものは分裂状態で刃を向け合っていた。

里見義通は小さな悩みを抱きつつも、冷静に情勢を見守っていた。

静かな燻りが古河公方家にあった頃、その調停者である関東管領・上杉顕定は、遠く越後にいた。

越後では関東上杉家の分家が代々守護職を司

っていた。特に越後上杉家は、関東管領山内上杉家より分かれたから血縁も濃い。その越後守護・上杉民部大輔房能が、なんと守護代・長尾為景により討ち取られ、国さえも奪われるといった事件が発生したのである。

下剋上の極みとはこのことである。長尾為景を討ち果たさんと、上杉顕定は軍勢を率いて越後へと乗り込んでいたのだ。

長尾為景。

のちに〈上杉謙信〉を名乗る長尾景虎の実父である。

上杉顕定から下野国足利の長尾景長へ差し出した、永正七年（一五一〇）六月二日付の書状には、関東留守中の懸念を伺う旨が記されている。すなわち父子和解を整えたはずの高基が、古河を抜けて関宿城に籠もったのではないかという点、雪下殿の空然が関東で挙兵したのではないかという点。そしてこの推測は、おおよそ当たっていたのである。

高基は築田高助の籠もる関宿城に移り、合戦の支度を急いでいた。この築田高助は、足利政氏の下で執事をしている築田政氏とは兄弟である。

空然は奥州から舞い戻り、武蔵国太田荘に籠もって父や兄へ対立する姿勢を示した。

そしてこれを好機とみた伊勢宗瑞も、上杉家を調略し権現山で挙兵させた。

留守中、足下に火がついた格好である。上杉顕定は冷静を欠いていたのかも知れない。そのためか、思いもかけぬ事態が起きた。

奇しくも書状が足利に着いたのと同じ六月二日、越後長森原にて、上杉勢と長尾勢が激突した。そして、この合戦で、なんと上杉顕定が長尾為景勢に討ち取られてしまったのである。

上杉勢は総崩れとなり、関東へ逃げ帰らなければならなかった。

この死をきっかけに、政氏・高基は再び対立をはじめた。関東管領・上杉家の後継者問題に足利家が関与したことが、諍いの発端だった。

古河公方・足利政氏の弟で顕定の養子となつた四郎顕実、顕定の又従兄弟で養子となつた五郎憲房、実子ではない後継者争いは、多くを巻き込むこととなる。顕実は実の兄・足利政氏に加勢を望んだ。片や憲房は政氏の子・高基に救いを求めた。常識なら余所の家のために父子が割れる無様はない。が、このとき、古河公方は双方に加担し、割れたのだ。

すなわち、足利政氏・上杉顕実と足利高基・上杉憲房の対立である。

この無意味を説く扇谷上杉朝良の仲介も失敗した。

房総では形式的に里見氏が政氏支援に立ち、原氏が高基支援に回った。これは里見氏が秩序を重んじる姿勢を示し、原氏が新興勢力を受け入れたことを意味していた。

+++++

割れる家(3)

夢酔 藤山